

# 歴史的市街地の保全とカナカマカーン・チュムチョン

－バンコク都プラナコーン区プレーンプートン地域を事例に－

マリー ケオマノータム 牧田 実\*

## はじめに

本稿の目的は、バンコクにおける歴史的市街地の保全に果たす地域住民の役割を居住権との関わりという視点から事例に即して明らかにすることにある。ここで取りあげるのは、バンコク中心部に位置するプラナコーン区のプレーンプートン地域である。プレーンプートン地域は、隣接するプレーンナラー地域、プレーンサッパサート地域とともにサームプレーンと呼ばれる地域の一角を占めている。サームプレーンは、19世紀末、かつての宮殿の跡地に、道路を画し、植民地様式の商店付棟割住宅を整備して築かれた、バンコクにおける近代的市街地のいわば発祥の地である。サームプレーンを構成する3地区のうち、プレーンサッパサート地域は火事で焼失、プレーンナラー地域は老朽化が進み、もはや昔日の面影を見ることはできない。本稿が対象とするプレーンプートン地域のみが歴史的景観を今にとどめている。

以下、本稿では、まずプレーンプートン地域の歴史と現況を概観し、景観保全に果たしてきた住民の役割を住民組織であるカナカマカーン・チュムチョン<sup>1</sup>（地域委員会）の結成とその活動をとおして跡づけるとともに、これを住民自身の居住権獲得をめぐる運動という視点から掘り下げ、さいごに若干の考察を加えたい。

## I プレーンプートン地域の歴史と概況

プレーンプートン地域は、プレーンプートン通り沿いを中心に展開する地域であり、北はプレーンナラー通り、南はバムルンムアン通り、東はタナオ通り、西はクームアングダム運河に接している（図1：地図）。プレーンプートン地域の北にプレーンナラー地域、プレーンサッパサート地域が広がる<sup>2</sup>。

サームプレーン一帯は、現在の王宮であるワットプ

ラケオーに連なる王族の居住地であり、宮殿の周辺には使用人たちの住宅が配されていた。1897年、王族の死とともに、土地は国王（王室財産事務所）へと返還された。この土地にバンコクで初めての近代的道路が整備され、保健所や学校などの公共施設と2階建の商店付棟割住宅が相次いで建設され、コロニアル様式の近代的町並みが現れた。この一角を占めるのがプレーンプートン地域であり、それはいわば西洋風高級ビジネス地区としての出発であった。

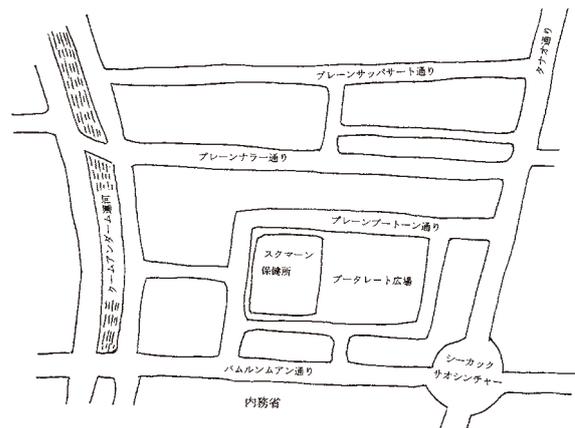


図1 サームプレーン地域の概略図

出典：カナカマカーン・チュムチョン・プレーンプートン資料より作成

プレーンプートン地域には、現在も多くの歴史的建造物や老舗店舗が残り、外国人観光客を引きつけている（写真1、2、3）。先述した保健所は、スクマーン保健所と呼ばれ、バンコクで2番目に古い。現在はタイ赤十字社の保健所となっている（写真4）。地域の中心部には住民の憩いの場であるプータレート広場（写真5、6）があり、この建物もここに位置している。ウィチアン自動車整備工場は、タイで最初の自動車登録局・運転免許試験場の建物を利用している（写真7）。外国のクラシックカーの整備・修理を手がけており、開業して70年になる。老舗の菓子屋、食堂、鍍金加工・宝飾店などが軒を連ねる棟割住宅そのものが歴史的建造物である。隣接するプレーンナ

\* 福島大学人間発達文化学類教授

ラー地域には、サムプレーンで唯一残っている王族の住宅がある。劇場や学校としての利用を経て、現在は法律事務所になっている。プレーンサッパサート地域には、サッパサートスパキット宮殿のアーチ門が残る。ステンドグラスの装飾を施された1901年の建造物である。



写真1 プレーンプートン地域の概観1



写真2 プレーンプートン地域の概観2



写真3 プレーンプートン地域の概観3



写真4 タイ赤十字社保健所



写真5 プータレート広場(憩いの広場)1



写真6 プータレート広場(憩いの広場)2



写真7 ウィチアン自動車整備工場の軒先

プレーンブートン地域の面積は約8ライ(1.28ha)、2012年現在、家屋数144、住民登録ベースで300家族、500人が住んでいる。地域の成り立ちからして商業者が多く、平均月収は15,000バーツ程度。階層的には小商店主を中心とする旧中間層が多い。民族構成は、6割が潮州出身者を中心とする華人であり、タイ民族は3割弱である。60歳以上の住民も多く、三世代同居が中心となっている。

## II 歴史的市街地とカナカマカーン・チュムチョン

### 1 住宅老朽化とカナカマカーン・チュムチョンの結成<sup>3</sup>

プレーンブートン地域にカナカマカーン・チュムチョンが組織されたのは、1998年のことである。建造から100年を経て、建物の老朽化が進み、住民たちに将来にわたって住み続けることができるのかという不安が高まっていたことが背景にある。プレーンブートン地域の土地・建物はすべて王室財産事務所所有・管理下にあり、住民は家賃・権利金とひきかえに居住権を与えられているにすぎない。住民自身が建物に補修を加えることは経済的に大きな負担となるばかりでなく、そもそも王室財産事務所によって禁じられていた。にもかかわらず王室財産事務所は一切のメンテナンスを放棄し、朽ちるにまかせるという状態であった。

折しも、1997年にタイを中心に広まったアジア通貨危機のただなかにあり、「働く人の台所」として盛況だった食堂街の客が大きく落ち込み、地域の将来すなわち自分たち住民の将来に暗雲が垂れ込めた時期でもあった。住民の有志が1年の準備期間をかけて話し合い、住民のまとまりをよくし、地域の歴史を知り、将来に備えるために、カナカマカーン・チュムチョンを立ち上げることにした。

1998年の発足時のメンバーは9人。役職構成は、会長、副会長(2)、書記、同補佐、会計、登録係、広報渉外係、総務係である。会長・副会長を中心とする発足時のメンバーが、1期(2002-03年)を除き、現在まで継続してカナカマカーン・チュムチョンを担っている<sup>4</sup>。委員数、役職構成とも変化なく今日に至っている。2011年現在のメンバーは、会長(男、42歳、料理店経営)、副会長(2名とも男、64歳と63歳、うち1人はウィチアン自動車整備工場の経営者)、書記(男、43歳)、同補佐(男、44歳)、会計(女、66歳)、

登録係(女、60歳)、広報渉外係(男、43歳)、総務係(男、68歳)であり、男性7人、女性2人、平均年齢は54.8歳となる。会長は1998年の発足時には30歳そこそこの若さであった。

### 2 カナカマカーン・チュムチョンと地域管理

プレーンブートン地域の中心にある広場はタイ赤十字社の所有地であり、広場の地下には第二次世界大戦時には防空壕があった。戦後は埋め立てられ、広場は生鮮市場になっていたが、数十年後に市場は撤去された。1998年、この土地に5階建ての建物の建築計画が持ち上がった。発足間もないカナカマカーン・チュムチョンは、住民の意向をまとめ、2階建てを基本とする既存の町並みに5階建ては高すぎ、地域の景観を壊すという理由で反対した。シリントン王女にも訴え、反対運動は5年にわたって続き、2003年ついに建築計画の撤回を勝ち取った。また、この運動の結果、広場は無償で住民に開放されることとなり、現在は住民の「憩いの広場」として利用されている。普段は子どもの遊び場として、また住民諸団体のさまざまな集会・会合や地域の祭・行事の会場として広く使われている。広場は、住民と区が分担によって管理している。住民は広場の清掃を行い、区は樹木の剪定、草木の水やり、電灯の管理などを担っている。

1990年代後半はバンコク都が都内各地の地域改善に着手した時期であり、王室の歴史的遺産の保全プロジェクトも始まった。プレーンブートンのカナカマカーン・チュムチョンは、これに真っ先に手を挙げ、1998年10月に「サームプレーンの美しい日」というイベントを開催した。そして、これを機会に、会長の発案により、住宅の老朽化対策も兼ね、棟割住宅の外壁を建築当時のイメージを再現する色調で統一的に塗装し直す計画を立てた。カナカマカーン・チュムチョンが中心となって、住民の合意を取り付けた。会長は複数の塗料会社を訪ね、歴史的建造物の外壁塗装に塗料を提供すれば広告にもなるとアピールし、協力を求めた。その結果、日本の塗料会社の寄付を得られることになり、実施に踏み切った。まず2カ所、約10ヶ月をかけて、住民自身が足場を組み、下地塗り、上塗り手順を踏んで作業を進めた。ところが、許可なく増築または修繕をしてはいけないという規則をタテに、所有者である王室財産事務所から強いクレー

ムが来た。契約違反ゆえ訴訟も辞さない、1軒あたり1,000 バーツの違約金を払えという内容であった。カナカマカーン・チュムチョンは、王室財産事務所と粘り強く話し合い、住宅のメンテナンスを住民自身の負担で行うことは、財産の保全という点で王室の利益にも適うことであると訴えた。結果として、訴えは聞き入れられた。のみならず、王室財産事務所は、2001年に建築物保全局を創設し、外壁塗装など一定のメンテナンスを住民自身が行うことを認めることになった。プレーンブートン地域の取り組みは、王室財産事務所と住民の関係に変化をもたらす先駆けとなったのである。

歴史的景観が保全されているプレーンブートン地域は、映画、テレビ、CMの撮影にもよく使われている。かつてはすべて自由に使われており、たとえばハリウッド映画「グッドモーニング・ベトナム」(1987)のロケではただゴミだけが残されたという。カナカマカーン・チュムチョン発足後は、これを有料とし、ロケ隊から1日2,000 バーツ(その後、5,000 バーツに改定)を徴収し、チュムチョンの収入とするようにした。最近のハリウッド映画のロケでは、1戸あたり1,500 バーツが配られたという。

現在、カナカマカーン・チュムチョンは、地域管理をもう一步前進させる計画を練っている。外壁塗装などの住宅のメンテナンスの継続はもちろん、電柱・電線類の地中化、景観を損なう各世帯のエアコン室外機やテレビアンテナの整理などへの取り組みである。電線類地中化には水道、電気、電話、下水などバンコク都が所管する多くのインフラ関係部局との連携が不可欠であり、また多額の予算を要する。室外機やアンテナの集合化には住民の協力が不可欠であり、また多くの自己負担をとまなうであろう。こうした点から実現までにはまだかなりの時間を要するものとみられるが、カナカマカーン・チュムチョンはラッタナーコーシン王朝時代の歴史地区のモデルになることをめざしている。

プレーンブートン地域は、2004年からバンコク・フォーラムというNGOの支援を受けるようになった。2002年に設立されたバンコク・フォーラムは、住民の力による旧市街地の再生に取り組むNGOである<sup>5</sup>。バンコク・フォーラムは、プレーンブートン地域に対して、歴史的市街地保全のコンセプトやリーダー養成のプログラム、住民参加の実践的ツールを提供してい

る。2009年には日本の国際交流基金の援助を受け、住民とともに日本への視察研修も実施した。こうしたNGOとの日常的な連携がカナカマカーン・チュムチョンの活動をサポートしている。

### 3 カナカマカーン・チュムチョンと地域活動

プレーンブートン地域において、こうした景観保全と地域活性化の活動を統括しているのはカナカマカーン・チュムチョンであるが、それはまた住民を代表する組織として広い意味での親睦と地域管理も担っている。ここでカナカマカーン・チュムチョンの組織と活動を概観しておこう。

プレーンブートン地域のカナカマカーン・チュムチョンはプラナコーン区の公認カナカマカーン・チュムチョンであり、市街地チュムチョンにあたる<sup>6</sup>。チュムチョンには区の地域社会開発補助金5,000 バーツ/月が提供されるが、金額の割に用途の制約が多く、会計処理も面倒なので、この地域ではなくてもいいという。支出はおもに地域の行事や葬儀の香典にあてられている。なおカナカマカーン・チュムチョンの会計報告は、集会や行事の案内とともに、憩いの広場にあるチュムチョン掲示板に張り出され、常に住民に公開されている(写真8、9)。



写真8 プータレート広場(憩いの広場)にあるチュムチョン掲示板



写真9 掲示されている会計報告

カナカマカーン・チュムチョンの会議は公式には月1回、18時から、行事などについて話し合う。そのほか主だったメンバーは、副会長宅(自動車修理場)の一角にある円卓にはほぼ毎日集まって、お茶を飲みながら「コーヒー議会」を開いている(写真10)。この円卓でこれまで100以上のプロジェクトの話し合いをしてきた。国の行事で住民の動員が必要など、緊急の時は臨時に会議をもつ。市街地なので有線放送の設備はない。たとえば、8月12日の王妃誕生日など、イベントのチラシは会長が作り、子どもにも手伝ってもらい、声をかけながら自分で全戸に配付している。現在の地域問題としては、商業地区だけに窃盗やホームレスへの対応がある。また住民が餌をやるために、野良犬や野良猫が増えてしまい、そのフンに悩まされている。



写真10 「コーヒー議会」が開かれる円卓

密集市街地なので毎年防災訓練をしている。いまのところ地域に大きな麻薬問題はないが、青少年が麻薬に走らないよう日頃から見回りをして注意している。2005年から国の麻薬対策事務所と協力し、3ヶ月に1回、麻薬防止のセミナーや研修会を開いている。スポーツでは、子どもが少ないので隣接地域と合同でチームをつくっている。日頃から関係をもっていれば、子どもたちがその地域で万引きをするようなこともない。次世代の人材を育成するため青少年対策に重点を置いている。2ヶ月に1回、憩いの広場で「創造の広場」を開催する。テントを出して絵を描いたり、靴下で人形を作ったりするほか、地域探検パスポートを作ってスタンプラリーをしたりする。子どもたちが地域に誇りをもてるようにしたい。広域で一緒に特産品づくりに取り組んだりもする。母の日、父の日、こどもの日に行事を行う。ソンクラーン(旧正月)は高齢者が中心の祭。地域の入り口が4カ所あるので地域名がわかる看板を掲げたい。観光客も多いので、タ

イ語だけでなく、英語と日本語も付けたい。

地域には、カナカマカーン・チュムチョン以外に婦人会があり、カナカマカーン・チュムチョンをサポートしてくれている。女性向けの職業訓練はしていない。商品の作り方を覚えても、販路がないのでは意味がない。青少年会があり、年3、4回、子どもの日などに、バンコク・フォーラムなど外部の人たちと行事や話し合いをしている。子どもが中心になって、Tシャツを販売し、研修のための資金とした。プレーンブートンの名所地図やホームページも子どもたちが作った。老人会もあり、朝、広場で運動をしている。貯金会はない。お金については干渉しない方がいい。この地域は階層的には中ほどであり、それほどお金に困っているわけではない。行政との関係では、よく話し合い協力しているが、お金の面ではなるべく頼らないようにしている。国会議員や都議会議員との関係はとくにない。

カナカマカーン・チュムチョンは、道路や水道、電灯など住民からの苦情にはすべて対応している。住民は基本的に「お金は出すから早く直して」というスタンスである。カナカマカーン・チュムチョンや地域活動に協力的な住民は4分の1ほどであり、一部の住民は「なにか利益があるから委員になっている」と噂している。それでも会長は、カナカマカーン・チュムチョンが地域の公式の「代表」であることに大きな意味があるという。困ったときに住民の声をまとめる窓口となって行政に対応することができるのはカナカマカーン・チュムチョンだけである。住民の理解がまだまだ十分でないことは今後の課題として受け止めている。

### Ⅲ 地域アイデンティティの再構築とカナカマカーン・チュムチョン

多くの住民にとって、プレーンブートン地域は、バンコクの歴史地域である以前に、日々の生活と商業活動の場である。住宅の老朽化は日常の生活問題であり、歴史的価値の保全の問題ではない。そもそも住民の多くを占める華人が近代バンコクの歴史遺産に大きな価値を見出すとは考えにくいし、また個人主義的性格の強い商業者が住民同士の親睦や連帯を求めているわけでもない。こうした住民特性に加え、所有者である王室財産事務所が建築物のメンテナンスを放置してきたという事情が相まって、旧市街地の

老朽化・荒廃がバンコクの広い範囲で急速に進みつつある。

一方、プレーンブートン地域がバンコク中心部に位置することは、たえず強い再開発圧力にさらされることを意味する。1990年代後半、オーストラリアの投資家がプレーンブートン地域全域の居住権を買い取り、一括して観光開発するプランを提示し、地元へ乗り込んできたことがある。空き家はもちろん、全ての住宅の居住権を買い取りたい、については1軒10万バツの紹介料を提供すると申し出たという。会長は即座に断り、開発プランそのものもアジア経済危機とともに潰えたが、2008年にもふたたび地域全体を巻き込む再開発計画が浮かび上がったという。住民すべてが王室財産事務所の借家人である以上、老朽化と開発圧力を背景とする「追い立て」の不安は常に存在するのである。

こうした状況におかれたプレーンブートン地域が他の歴史的市街地と同様、緩慢に荒廃の道をたどったとしても不思議はない。では、なぜ、プレーンブートン地域では、歴史的景観を住民自身の手によって保全する動きが生まれ、広場や施設の管理へとつながったのであろうか。さいごに、プレーンブートンの地域運営を支える要件を抽出することにしたい。

まず、第一に、カナカマカーン・チュムチョンの強いリーダーシップをあげなければならない。行動力ある若いリーダーに率いられたプレーンブートン地域のカナカマカーン・チュムチョンは、住民を代表する組織として、意思決定と執行の両面でたしかな実績を積み上げることによって、矛盾をはらんだ住民感情をうまく水路づけてきたといえることができる。ともすればバラバラになりがちな保守的で個人主義的傾向の強い旧中間層を居住権の確保という共通利害で結びつけ、住民の連帯を醸成してきた地域運営の手腕は大いに評価できる。

第二に、カナカマカーン・チュムチョンが地域の自立/自律的運営を基本とし、行政やNGOなどとは適度な距離を保ち、持ちつ持たれつ関係を築いてきたことである。住宅が国有財産であることもあるが、チュムチョンとしての公認を受けた後もバンコク都行政には依存しすぎない姿勢を貫き、国会議員や都議会議員など政治家とは一切の関係を持たないできた。また外壁塗装をめぐるトラブルとなった王室財産事務所への対応では毅然とした態度を貫いた。こうし

た自立/自律的運営が住民の信頼につながっている。一方、地域支援のNGOからは、住民参加の技法や地域保全の思想を積極的に学ぶなどして、その資源とネットワークを柔軟に取り入れてきたことも注目に値しよう。

第三に、こうした実践をとおして、居住権の確保と経済的安定という住民個々の利害と町並み保全という公共的関心が自然に結びついたまちづくりの「思想」が形成されつつあることに注目しておきたい。住民相互の協力と負担によって、いわば公共的規制を住民自身が担保し、地域全体の価値を高めることが、結局は自分の居住権を守ることにつながり、観光客の誘致という点で経済的利益にも適うことが徐々に認識されつつある。多くの地域で忘れ去られてきた歴史的価値が生活と密着した地域アイデンティティとして再構築されつつあり、それを子どもたちに向けた地域活動をとおして、次世代へと継承する努力が行われているのである<sup>7</sup>。

もちろんプレーンブートン地域のまちづくりはまだ緒についたばかりであり、一般住民の認識も協力も必ずしも十分といえる水準にはない。しかし、この近代バンコクの発祥の地における地域再生の試みは、住民自身の発意によるまちづくりの実践という点で、バンコクの将来を占うモデルとなりうる事例であり、今後の展開が大いに注目される。

<sup>1</sup> チュムチョンは、バンコク都による地域社会開発政策の対象となっている地域を指す。チュムチョンには、①過密無秩序チュムチョン（スラムに相当する）、②郊外チュムチョン、③新興住宅チュムチョン、④団団住宅チュムチョン、⑤市街地チュムチョンという5つの類型がある。バンコク都によって認定されたチュムチョンでは、都の規約にもとづき、住民の投票によって7名を基本とする代表委員が選出され、このメンバーによって委員会が組織される。これがカナカマカーン・チュムチョンである。

<sup>2</sup> 「サームプレーン」は「3つの分かれ道」という意味であり、プレーンブートン通り、プレーンナラー通り、プレーンサップサート通りを指している。3つの通りはいずれもラーマ4世（1853-1910年）の子である、プータレスダムロンサック王子、ナラーティップバラバンボン王子、サップサートスパキット王子の宮殿があったところであり、地域名はいずれも王子の名前に由来している。

<sup>3</sup> 聞き取りは、2011年8月11日と2012年8月10日にティエラボン・カチャーチャーワ会長を対象として行った。

<sup>4</sup> プレーンブートン地域で立候補者が定数を超え、投票となったのは2002年の改選のみである。発足時のメ

ンバーが2期を務めたところ、委員には「利益」があるものと思いだんだ対立グループが候補者を立て、結果として当選した。しかし、実際には委員は苦勞ばかりで実入りはまったくなかったので、1期で放り出したという経緯があるとのことである。

<sup>5</sup> バンコク・フォーラムの主宰者である大学教授は、フォーラム設立前、1997年にプレーンブートン地域の近くで歩行者天国を企画し、実施した。これを報道で知り、興味をもったプレーンブートンの会長が教授を直接訪ね、話を聞いたのが、その後のバンコク・フォーラムとの連携の始まりだとのことである。

<sup>6</sup> プラナコーン区には、2010年現在、市街地チュムチョンが14、過密無秩序チュムチョンが7、計21チュムチョンある。

<sup>7</sup> プレーンブートン地域のカナカマカーン・チュムチョンが作成した地域紹介のリーフレットにはつぎのような詩が掲載されている。

空にそびえる建物

川沿いに林立する超高層マンション

これがバンコクの発展の象徴

プレーンブートンはバンコクのいにしへの姿をとどめる伝統ある地域のひとつ

ここでは人は親密な関係の中で暮らしている

ここは古きよきバンコク

## 参考文献

バンコク・フォーラム(2011)、『歴史的市街地の再生－日本の経験をタイへ』サワッディー出版

[付記] 本研究は、平成22-24年度科学研究費補助金(基盤研究C)「タイ都市社会の変容と地域住民組織」による成果である。

**Preserving an Historical District and the**  
***Khanakammakan Chumchon* :**  
**Case Study of the Phraeng Phuthon Community**  
**in Phra Nakhon District of Bangkok**

KAEWMANOTHAM Malee and MAKITA Minoru

**Abstract**

The purpose of this paper is to shed light on the role of local residents in preserving Phraeng Phuthon, a historical community in Phra Nakhon District in the center of Bangkok. Phraeng Phuthon was one of the first urban districts that was developed in Bangkok on the site of a former palace toward the end of the 19th century as roads were constructed and colonial style interconnected housing with shops on the ground floor was erected along the roads. The paper traces the role of local residents in preserving the character of Phraeng Phuthon through their involvement in the community-based *khanakammakan chumchon* (community committee) activities, and considers this involvement in light of the movement of local people to obtain the right to residency.

(2012年11月1日受理)